

## 星の子

### 第一章 赤ん坊

ある冬の夜、松の木々からなる大きな森の中を、二人の木こりが歩いて家に帰っていました。とても寒くて、地面には雪が積もっていました。

木々は冷たく、鳥たちは冷え、動物たちは寒い思いをしていました。

ウサギたちは自分たちの穴にいて、リスたちは木にいました。

しかし、二人の木こりは自分たちの旅を続けました。

木こりたちは旅人たちの守り神である聖マルタンに祈り、彼らはずいぶん遠くにある自分たちの小さな村の明かりを見ました。

木こりたちはとてもうれしくて、笑いました。

今や、地球は銀色の花のように思われ、月は金色の花のように思われました。

しかしすぐに、彼らはまた悲しくなりました。

「俺たちはなぜ、あんなに幸せだったのだろうか？」と木こりの一人が尋ねました。

「人生は俺たちのような貧しい人間のためではなく、裕福な人間のためのものだ。雪の中で死ぬか、野生の動物に食べられてしまう方がましだ」

突然、とても奇妙な何かが起こりました。

とても明るくて美しい星が、空から雪の中に落ちたのです。

「見ろ」と木こりの一人が、友達に言いました。

「おそらく大量の金が見つかるぞ。見に行ってみよう！」

木こりたちが着くと、彼らは白い雪の上に金色に輝くものを見つけました。

しかし、それは木こりたちが求めていたような宝物ではありませんでした。

それは、金色の星をちりばめた金色の外套でした。

木こりたちが外套を広げると、中で小さな赤ん坊が眠っているのが見えました。

赤ん坊の首の回りには、琥珀の鎖がありました。

「こいつはよくないな」と、木こりの一人が言いました。

「赤ん坊をここに置き去りにしよう。俺たちにはあまりにもたくさんの子どもがいるし、食べ物を買うための十分な金がない。もう一人子どもはいらないよ」

「でも、俺たちはこの小さな赤ん坊をここに一人にはしておけないよ」ともう一人の木こりが言いました。

「赤ん坊はきっと死ぬだろう。赤ん坊と一緒に家に連れて帰ろうと思う。俺たちにはたくさんの子どもがいるし食べ物も十分にはないが、妻が赤ん坊の世話をしてくれるはずだ」

そして、善良な木こりは赤ん坊を腕に抱えて連れて行き、家へと向かう旅を続けました。

木こりたちが自分たちの村に着くと、最初の木こりが「お前にはその赤ん坊がいるのだから、お前は俺に金の外套をよこさなければならない」と言いました。

しかし彼の友人は、「いいや、この外套はお前のものでも俺のものでもない。赤ん坊の外套だ。赤ん坊と一緒になければならない」と答えました。

木こりの妻は、夫を見るととても喜びました。

彼女は腕を夫の周りに回して、キスをしました。

「森であるものを見つけて、お前のためにそれを家に持って来たんだ」と夫は言いました。

「いいわね、それって何？ 私たちはとても貧乏だから、たくさんの方が要るものね」

しかし彼女は赤ん坊を見てカンカンに怒りました。

「私たちにはもうすでにたくさんの子どもがいるし、食べ物を買うための十分なお金もないのよ。もう子どもは欲しくないわ」と彼女は言いました。

しかしそれから赤ん坊を見ると、彼女の心は哀れみの気持ちでいっぱいになりました。

「この子は星の子なのだ」と夫は言いました。

「俺たちはこの子を愛するべきだよ」

そこで妻は、寝かせるための小さなベッドに赤ん坊を置きました。

妻は、外套と鎖を胸の中に入れました。

「ええ、私たちはこの子を愛するでしょう」と妻は答えました。